

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

**コバケン十八番のチャイコフスキー！
高木竜馬との熱い共演も要注目**

今回の「休日の午後のコンサート」は〈ザ・コバケンII〉。昨年10月の「平日の午後のコンサート」の〈ザ・コバケンI〉に続いて、“炎のマエストロ”小林研一郎お得意の楽曲が披露されます。

プログラムの中心をなすチャイコフスキーは、幾度となく熱演を展開してきたコバケンの超十八番作曲家。今年4月には80歳を祝う「交響曲全曲チクルス」も開催されますので、ここはそのエッセンスを先取りする好機といえるでしょう。ソリストは2018年のグリーク国際ピアノコンクールで優勝した高木竜馬。今回の演目は、同コンクールのファイナルの必須曲であるグリークのピアノ協奏曲ですから、俊英の真価を知るこの上ない機会となります。

チャイコフスキーとグリークは1840年と1843年に生まれた同世代の大家。共に西欧とは異なる地で個性を花開かせた両者の音楽を、円熟の極みにあるコバケンのタクト、そして高木のフレッシュなピアノで味わう、興趣に溢れたコンサートです。



今年80歳を迎えるマエストロ・コバケン得意の楽曲とお話をお届けします

©上野隆文

緩やかな3拍子の民族舞曲の様式で 華麗なる貴族世界を表現



本日演奏されるロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)の2曲は、創作面では充実期、私生活では波乱の時期に並行して書かれた作品です。

1875年にピアノ協奏曲第1番、1876年にバレエ『白鳥の湖』を完成させたチャイコフスキーは、1877年に入ると交響曲第4番、さらには歌劇『エフゲニー・オネーギン』の創作に着手しました。そこに悲劇が襲いかかります。彼は、1877年4月にモスクワ音楽院の教え子ミリュコヴァから熱烈な求愛を受け、7月に結婚しました。しかし結婚生活はすぐに破綻。9月にはモスクワ川に入水して凍死を企てます。そして病んだ精神を癒すため、10月にロシアを脱出し、翌1878年4月までスイス、フランス、イタリアで静養しました。また同時期には、鉄道王の未亡人メック夫人からの私的年金が約束され、フリーランスになる道が開けました。今回の2曲はこの激動期の1878年に完成された作品。なお同年には有名なヴァイオリン協奏曲も書かれています。

幕開けは歌劇『エフゲニー・オネーギン』より“ポロネーズ”。チャイコフスキーは10作にのぼるオペラを残しました。5作目にあたる本作は『スペードの女王』と並ぶその代表作。プーシキン原作の物語(全3幕)は、田舎娘タチヤーナの純愛を冷たく退け、友人を決闘で殺してしまった貴族の青年オネーギンが、数年の放浪後に美しいグレーミン公爵夫人となったタチヤーナと巡り会い、改めて彼女に恋心を抱くものの、今度は彼が拒絶されるといった内容です。

“ポロネーズ”は第3幕冒頭のグレーミン公爵家の舞踏会で演奏される管弦楽曲。開幕を告げるファンファーレに続いてポロネーズ(ポーランドの緩やかな3拍子の民族舞曲)の様式による堂々とした音楽が展開され、貴族の華麗な世界が表現されます。



イリヤ・レーピン作『オネーギンとレンスキーの決闘』

ドイツ・ロマン派と北欧の民族音楽が 融合したグリーグの出世作



おつぎはノルウェーの国民的作曲家**エドヴァルド・グリーグ**(1843–1907)の**ピアノ協奏曲 イ短調**。北欧の同ジャンルを代表する1曲です。

グリーグは、1867年にソプラノ歌手ニーナと結婚し、1868年には女の子が生まれます。同年彼は妻子と共に妻の両親がいるデンマークのコペンハーゲンに行き、主に当地郊外の夏の家でこの協奏曲を作曲。翌年に初演され、熱狂的な喝采を浴びました。つまり本作は、25歳の若きグリーグが幸せな時期に生み出した出世作です。しかし愛娘は1年後に亡くなりました。



グリーグと妻のニーナ・ハーゲルupp

グリーグは、15歳からライプツィヒに留学してメンデルスゾーンやシューマンなどドイツ・ロマン派の音楽を吸収し、18歳でピアニストとしてデビューしました。さらに20～24歳時にはデンマークで民族的な音楽の大切さを学びました。この曲にはこれらの経験がすべて生かされています。すなわち、ドイツで学んだ協奏曲の形式とロマンティックな音楽、祖国の民族音楽、得意とするピアノ音楽の各要素が合体した名作です。

曲は短調を基調としながらも明るさが漂う音楽。ソロ・パートには名人芸的な技巧が盛り込まれ、豊かなリリシズムと共存しています。そして何よりノルウェーの厳しくも美しい自然を感じさせる点が独自の魅力といえるでしょう。

第1楽章：アレグロ・モルト・モデラート。ティンパニのロールの頂点でピアノが華麗に登場する出だしがインパクト大。その後は2つの主題を中心に、甘美さ、軽快さ、力強さが混じり合いながら進行します。

第2楽章：アダージョ。北欧の清澄な空気感を湛えた、夢見るような音楽が展開され、途中で華やかな部分も出現。切れ目なく第3楽章へ移ります。

第3楽章：アレグロ・モデラート・モルト・エ・マルカート。行進曲風に開始後、活気ある音楽が続き、フルートがのどかな旋律を奏する遅めの中間部を挟んで、壮大な盛り上がりを見せます。



グリーグの故郷ノルウェー第2の都市ベルゲン

“運命との闘いと勝利”を描いた 情熱的でダイナミックな交響曲

後半はチャイコフスキーの交響曲第4番。彼の三大交響曲の第1弾です。1878年1月に静養先のイタリア、サンレモで完成。同年モスクワで初演されました。なお楽譜には「わが良き友に」と記されており、献呈されたその「友」はメック夫人を指すとみられています。

曲は情熱的でダイナミック。メック夫人への手紙の記述等から、内容は「当時の自身の苦悩を反映し、“運命との闘いと勝利”を描いた音楽」とみられています。冒頭で強奏されるファンファーレ風の旋律＝通称「運命主題」が全曲の核となり、第1、2楽章が短調、第3、4楽章が長調という“暗から明へ”の構成がなされています。また、ロシアの民族的な要素のみならず、作曲時に滞在していたイタリア的・ラテン的な要素が含まれており、その点が多彩な魅力をもたらしてもいます。

以下＜ ＞内は、メック夫人へ向けた説明の一部です。

第1楽章：アンダンテ・ソステヌート — モデラート・コン・アニマ。 劇的な開始楽章。遅めの序奏に続いて、弦楽器が出す悩ましげな第1主題＜絶望は激しくなる＞、クラリネットが出す甘美な第2主題＜幸福、しかしそれは夢でしかない＞



チャイコフスキーのパトロンとして、直接会うことのないまま文通を繰り返したフォン・メック夫人

を中心に、激しい展開を遂げます。＜人生の波は、我々を呑み込んでしまう＞。

第2楽章：アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ。メランコリックな緩徐楽章。哀しげなメイン主題が様々な楽器で奏され、中間部は素朴な舞曲調となります。＜夜中ひとりである時に包まれる憂鬱な気分。若い頃の思い出は楽しい。しかし新たな人生を始める気力はない＞。

第3楽章：スケルツォ：ピッツィカート・オスティナート — アレグロ。弦楽器のピッツィカート、木管楽器の弾んだ合奏、金管楽器中心の行進曲の3部分が交替し、最後は合体するユニークな楽章。＜ほろ酔い気分の中で飛び交う気まぐれな唐草模様＞。

第4楽章：フィナーレ：アレグロ・コン・フォーコ。激烈な第1主題、ロシア民謡「野に立つ樺の木」に基づく第2主題、活発な第3主題が交互に登場しながら進む、迫力に充ちた終曲。途中で「運命主題」が活気を遮りますが、圧倒的な興奮が戻って終結します。＜民衆の祭りの日。こんなに素朴な幸福がある。これを喜びなさい。そうすればまだ生きていける＞。



交響曲第4番のオーケストレーションは1878年1月に静養先のイタリア北西部サンレモで完成した

しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）。